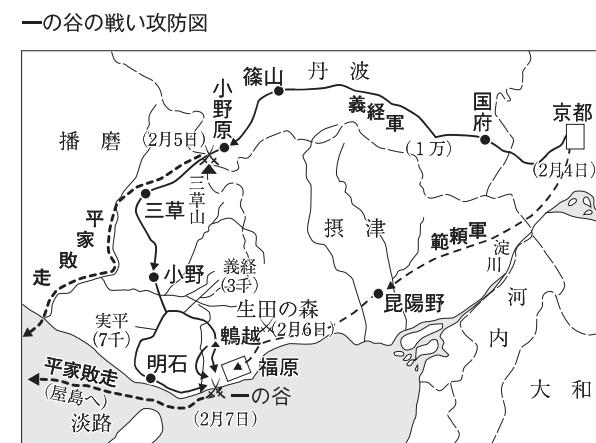


前置きが長くなつたが、ここからが掲出本文の内容となる。果敢な義経像はさらに強化される。探究のために後述するが、そもそも史実としての鶴越の位置はいまだ定説を見ず、物語が作り出した虚構の地形であるとも考えられ言葉であり、越中前司は、果敢で勝つためには手段を選ばない義経とは対照的な人物として描かれている（探究のために参照）。



を攻めることにした。物語は卷第九「老馬」で地元の老翁を登場させ、鶴越は馬が通うことなど思いも寄らない悪所だと語らせるが、それに対し義経は「鹿のかよふ所を、馬のかよはぬやうやはある」と言つた、として、「坂落」への伏線としている。

さて、いよいよ義経軍は二月七日の早朝、鶴越へとさしかかる。義経がまさに馬で崖を下ろうとしたとき、大鹿二匹、妻鹿一匹が一の谷へと落ちていった。この鹿たちは、越中前司の陣へと迷い込んだので、平家方では「用心深い鹿は深山にいるはずなのに、こんな大勢の中に来るのはおかしい。上の山から源氏軍が落としたのではない」と用心する声も上がるが、結局「敵方から来たものを逃すわけにはいかない」と大鹿二匹を討つただけでそれ以上の対応はせず、越中前司・平盛俊は、「鹿を射ても意味がない。この一矢で敵十人は防げたのに。罪を作つて、矢を浪費して」と言う。これは、源氏軍への警戒ではなく、矢を浪費したことと、無益な殺生を咎めるだけの言葉であり、越中前司は、果敢で勝つためには手段を選ばない義経とは対照的な人物として描かれている（探究のために参照）。

- ① 義経はどのような将軍として描かれているか。
- ② 義経の奇襲は、どのような結果をもたらしたか。

### ◆◇鑑賞◆◇

源義仲を討ち取つた源頼朝は、いよいよ平家の追討へ専念することになる。義仲の追討軍として派遣されていた源範頼（頼朝の異母弟）・義経の軍勢は、一一八三（寿永二）年正月、西国へと発向した。

義仲と頼朝が争つてゐる間、態勢を立て直した平家軍は旧都・福原まで進出し、都を奪還する機会を窺つていた。卷第九「六ヶ度軍」には、平家に背く四国の武士を征討する平家軍の様子が語られている。義仲の追討軍として派遣されていた源範頼（頼朝の異母弟）・義経軍は平家の追討のため西進、大手軍を範頼が率い、搦手軍を義経が率いて、二月四日に都を発つた。

丹波路を進む義経軍は、二月五日の夜、播磨国、三草山の平家の陣に夜襲を仕掛けた。物語には、戦は翌日と心得た平家の軍勢がぐつすりと眠りこけ、油断している様子が描かれている。義経の夜襲戦法が少なくとも大方の平家の武士にとつては想定外の出来事であつたことがわかる（二月四日は清盛の命日ということで攻撃が避けられ、五日・六日も忌日があるので、戦闘はないと踏んでいたようである。事実、矢合は二月七日と定められた、と物語にはある）。三草の合戦に勝利した義経軍は、一万騎を二手に分けて、土肥次郎実平に七千騎を任せ、自身は三千騎を率いて鶴越から一の谷

### ◆◇鑑賞のヒント◆◇

- 1 義経はどのような将軍として描かれているか。